

アンケート調査

研究者による 研究コミュニケーション活動に 関する調査

現状と課題についての Key Findings と考察

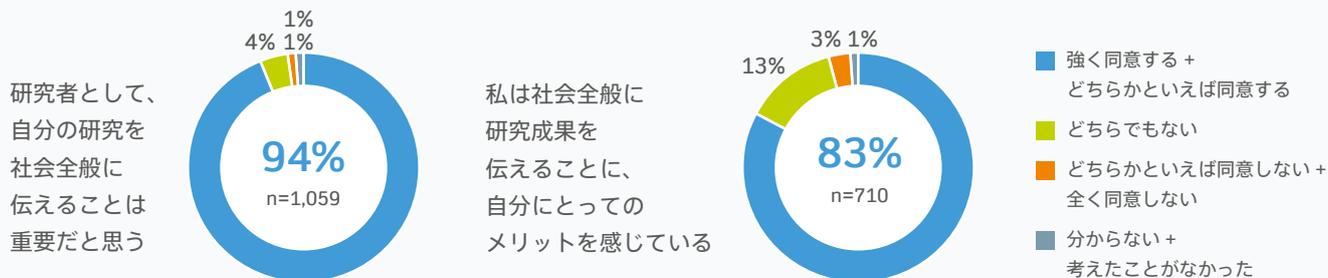
シュプリンガーネイチャー・ジャパンは、研究者自身による社会全般を対象とした研究コミュニケーション活動に関し、研究者の習慣、意識や課題について理解を深めるため、2023年1月にアンケート調査「研究者による研究成果の情報発信活動」を実施した。本インフォグラフィックは主な調査結果の一部と Springer Nature Japan Research Advisory Forum (JRAF 2023) で行われた議論をまとめたものである。

ADVANCING
DISCOVERY

研究や研究成果を社会全般^{*1}に伝えることへの価値と関心



回答者の約**90%**は、研究成果を社会全般に伝えることの重要性に同意と関心を示した。また回答者の**75%**以上が自身の研究コミュニケーション活動にメリットを感じており、活動を楽しんでいると答えた。



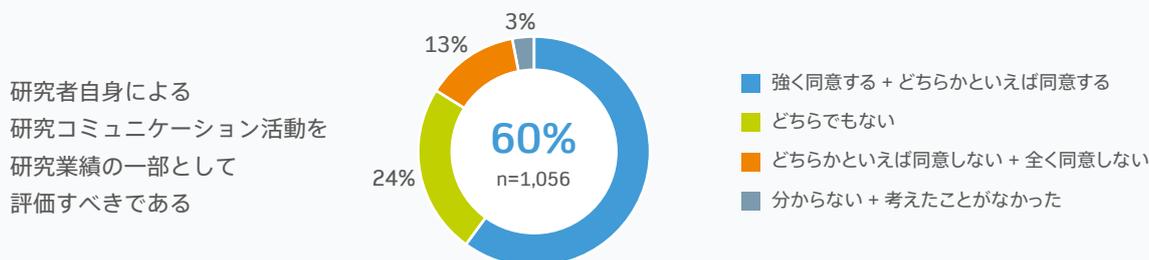
回答者が研究内容や成果を情報発信した目的のうち上位2つは：

- 「社会全般にとって興味深いと思われる研究成果を共有するため」
- 「自分の研究を広く周知するため」

研究者自身による研究コミュニケーション活動^{*2}は研究業績の一部として評価されるべきか？



60%の回答者は、研究者自身による研究コミュニケーション活動は、研究業績の一部として考慮されるべきであると答えた。



40～50%の回答者は、研究コミュニケーションをより多く実施する動機として以下を選択：

- 「所属機関や研究資金配分機関から、研究業績として評価に加算される」
- 「一般市民や学生からの関心を集める」
- 「雇用プロセスにおける肯定的な評価」

*1 本調査において「社会全般」の定義とは、研究者、メディアから専門知識を有しない一般市民までを指す。

*2 本調査において「研究コミュニケーション」の定義とは、研究内容や成果の伝達や発信であり、プレスリリース、メディアによるインタビュー、ソーシャルメディア、市民講義等を指す。なお、本調査では学会発表は含まれていない。

研究コミュニケーションのためのサポート、リソースやトレーニング



回答者の約 **80%** は、効果的に研究や研究成果の情報発信やコミュニケーションを行うにはサポートが必要だと答えた。多くの回答者は、サポートやトレーニングを受けていない、もしくは、利用可能なリソースについて知らなかった。



70~99% の回答者は、下図の内容に関するサポートがあれば、研究コミュニケーションに役立つと答えた。

■ 回答者が、自身の所属機関が提供していることを認識していたサポートやトレーニング

n=756

■ 回答者が、実際に役立った、また役に立つと思ったサポートやトレーニング

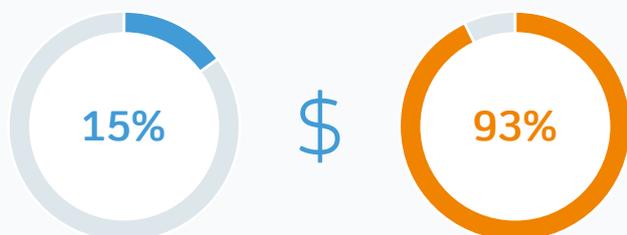
非専門家向けのサイエンスライティング



メディアとの交流に関して



資金面のサポート



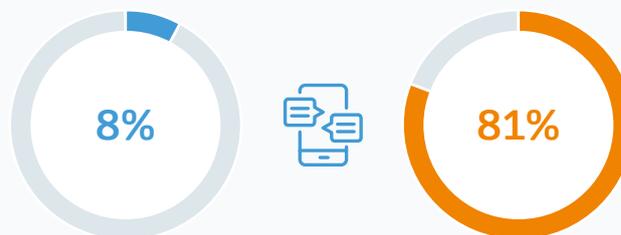
口頭でのコミュニケーションやプレゼンテーションの方法



研究コミュニケーションのための視覚資料作成方法



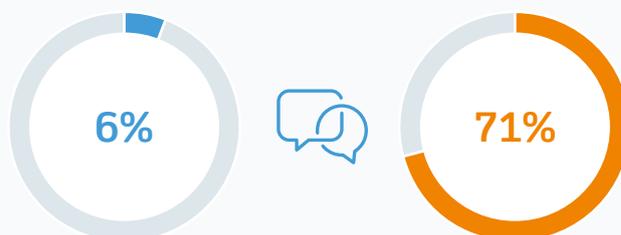
ソーシャルメディアの活用方法や付き合い方



研究コミュニケーションのための動画作成方法



対話スキルのトレーニング



研究者と研究機関への推奨



研究者

リソース、サポートやトレーニングの機会について所属機関に問い合わせる

所属機関に利用可能なリソースやトレーニングについて確認し、サポートが必要な場合は求める。

小さな進展を効果的に伝える

すべての研究コミュニケーションが大きな進展について述べているわけではないため、一つ一つの進展や発見の重要性を効果的に説明する方法を検討する。

研究成果の背景となるストーリーを共有する

研究成果そのものだけでなく、いかにして成果を得たかなど、研究の背景や道のりといったストーリーの共有を検討する。



研究機関

リソースやトレーニングについて研究者とコミュニケーションを図る

研究者に対してリソースとトレーニングを提供し、研究者への周知を徹底する。
効果的な情報発信やコミュニケーションの促進のため、研究者のニーズや関心について話し合う。

研究コミュニケーションを研究業績の一部として考慮する

多くの研究者は、研究コミュニケーションは研究業績の一部として評価されるべきと考えている。
研究コミュニケーションの取り組みがすでに業績として認められている場合、研究者への周知を徹底する。

研究コミュニケーションのインパクトを追跡する

研究者は研究コミュニケーションのインパクトの追跡に関し、サポートを必要としているかもしれない。
研究者自身が把握できない、もしくは把握が困難な指標や利用状況の追跡と共有は、研究者が自分の研究や成果をより積極的に情報発信する動機に繋がる可能性がある。

研究者と研究機関の双方



お互いのニーズや関心について理解を深められるような機会をつくる

研究コミュニケーションを、一方向の情報発信ではなく、受け手との双方向の活動として捉える